

グローバルな思想・ローカルな思想に基づく 環境倫理思想

池田菜摘（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：環境倫理、グローバル、ローカル、合意形成

序論

人間の手が入っていない原生林や希少動物を「保護すべきもの」と考える人がいる。しかもこのように考える人たちは、往々にして、自らの立場をグローバルに成り立つものだと考える。しかし、今このような「グローバル」と信じられた思想にもとづく政策が一律に地球上のあらゆる場所で実施されることにより、さまざまな問題が生じている。熱帯雨林で伝統的な生業を営んできた地域住民の生活が、森林保護という名のもとに破壊されているのはその一例である。本論文では、これまで主流をなしてきたグローバルな環境倫理と、それを批判する形で現れたローカルな環境倫理の関係を探ることを目的とする。

第一章 グローバルな環境倫理

第一節 グローバルな環境倫理

グローバルな環境倫理とは、グローバルスタンダードとしての環境倫理を意味する。グローバルスタンダードには、「世界に広く受け入れられている」という記述的な用法と、「世界に広く受け入れられるべき」という規範的な用法があるが、「グローバルな環境倫理」は後者の用法である。つまりグローバルな環境倫理とは、語りかける相手がどのような立場を採っていようと、自らの考えを受け入れるべきだと主張する倫理なのである。よって、グローバルな環境倫理は、温室効果ガスへの対策など地球規模で行われる環境保護を推し進める際に、各国が協力して行う政策の方向付けなど、様々な民族・文化・思想を背景に持つ人々を束ね、目標や行動を共にする際に役立つ思想だと考えられる。

グローバルな環境倫理の一例は、ピーター・シンガーの動物解放論である。ここでは、「快苦を感じる存在には、平等に配慮しなければならない」という主張が普遍的な原理として語られている。すなわちシンガーは、それまでの動物と人間の関係の歴史などの個別的な文脈を無視し、快苦を感じる動物への態度を変更するべきだと主張するのである。

第二節 グローバルな環境倫理の問題点

従来の環境倫理では、人間と自然の二分法が根本にあった。そうした考えは、一方では人間中心主義という形で環境問題を引き起こし、他方の自然中心主義においては、内在的価値

を持つものとして特に「原生自然」が保護の対象とされてきた。この立場に与する人々は、原生自然がもつ内在的価値を、人権と同じように普遍的な考えだと主張し、それまでの人間と自然の関係性を無視し、世界中のどこにおいても、人間による原生自然の利用を禁止する可能性がある。しかし鬼頭秀一によれば、原生自然に内在的価値を与える思想は、もともと西洋社会、特にアメリカにおけるロマン主義をきっかけとしたローカルな文脈の中で出現したものに過ぎない。それにもかかわらず、そうした思想が強い力をもっている背景には、「グローバルであること」と「普遍的であること」の混同が存在する。「持続可能な発展」のような国際的に採択された理念は、現在においては妥当だと考えられているだけの、せいぜい「グローバル」な基準としての理念であり、永遠に妥当だとされる「普遍的」なものではない。しかし両者が混同されているために、グローバルな環境倫理は、自らを普遍性という強い根拠を持った思想であるとみなし、地域の個性をイレギュラーなものとして捉えるのである。こうしたことを避けるためには、桑子敏雄が言うように、「グローバルであること」と「普遍的であること」を区別する必要がある。

第二章 ローカルな環境倫理

第一節 鬼頭秀一のローカルな環境倫理

鬼頭は、人間と自然との深い関係性を主軸にした環境倫理の必要性を訴えている。そして「人間の営み」、つまり狩猟採取・農業・漁業・林業といった「生業」を否定的に捉えるのではなく、人間と自然の関わりの中で営まれる「生業」こそが、人間と自然との関わりそのものだと主張する。例えば、飼育してきた動物を殺して食べる時、人間と動物の間には精神的な深い交流があると考えられる。そして動物を殺す際には、宗教的儀礼を行う、またはハレの日に殺して食べることが一般的となっている。つまり、そこには動物を生活の糧として殺して食べるという機能的なかわりだけでなく、宗教や文化に根ざした精神的なかわりがあり、その二つのかわりは不可分な形で存在しているのである。鬼頭は、人間と自然のつながりがもつ二つの側面を「社会的・経済的リンク」「文化的・宗教的リンク」と呼び、この二つのリンクが不可分な形でネットワークを形成していることが、人間と自然との「生

身]のかかわりの本質であるとし、これを復元することが環境を豊かにすると考える。さらに、二つのリンクの絡み合いの中で「地域のために、また子孫のために持続可能な利用をしていこうとする有りようを、地域の人々がローカルな環境倫理として確立していく」(鬼頭,1996,p.160-161)が必要だと述べ、人間と自然の「つながり」、歴史性に基づく世代を超えた「つながり」、共同体の合意形成を通して新たにつくられる「つながり」の重要性を訴えている。

第二節 桑子敏雄のローカルな環境倫理

鬼頭の「つながり」の議論を、別の視点から語っているのが桑子である。桑子は、里山など人間の手の入った自然に対する環境倫理を構築しようとしてきた。その中で彼が到達したのが、「空間の履歴」という考え方である。桑子によれば、われわれの身体が配置される「空間」は、歴史的なできごとによって様々な意味付けを与えられており、空間は歴史性をもつといえる。桑子が「空間の履歴」という概念で表しているのは、空間がもつ歴史性である。例えば、その空間で今まで起こった出来事、その場所の自然環境や生態系、地形、地域の伝統や文化、風土などである。履歴をもった空間との出会いによってひとの履歴がつくられるのであり、空間の履歴なしには自己は成立しない。つまり、ひとの履歴の内容は、身体の配置される「空間の履歴」に大いに依存するのである。また、ひとの履歴の豊かさはひとの人生やひとの心の豊かさをつくりだし、「空間の履歴」の豊かさは豊かな空間をつくり出す。「豊かな空間と豊かな心とは不可分な関係にある」(桑子,1999,p.31)。環境倫理は、こうした空間の履歴を守るものとして存在すべきだと桑子は言う。

第三章 ローカルな思想とグローバルな思想

第一節 「空間の履歴」と合意形成

環境倫理においては、しばしば合意形成の困難さが指摘されてきたが、桑子はこの問題にも取り組んでいる。彼は、「社会基盤整備や環境問題の意見の対立がある中で、よい合意を目指すために、多様な価値観の存在を認めながら、人々の立場の根底に潜む価値を掘り起こしてその情報を共有し、お互いに納得できる解決策を創造していく」(桑子,2006,p.116)ことを目指すが、「根底に潜む価値」と「空間の履歴」は密接に関連している。彼の方法は、河川の治水事業や、森や浜の保存(または保全)・復原などに際して、周辺地域に住む住民たちが、自分たちが住む空間を豊かなものにするために考え、行動するための重要な指針を与える。

第二節 グローバルな空間における合意形成

しかし、グローバルな規模で起こっている環境問題において、桑子の方法を用いることは難しい。このとき参考になるのが、アルネ・ネスのグローバルな環境倫理である。ネスは、人々の基本的な価値観、それに基づく社会の構造が抱える諸問題に対して深い問いかけをしていく、ディープ・エコロジー運動を提唱した。ディープ・エコロジーという言葉は二つ

の意味で用いられる。広い意味では、生命中心主義に基づくエコロジー運動全般を指し、狭い意味では、エコロジー哲学を、特にネスの自然に対する個人的哲学「エコソフィ T」を指す。ネスはエコソフィ T で自然の内在的価値を認めた上で、生命を関係論的・全体論的に捉えながらも、多元主義的な要素を含んだ主張を核としている。しかしネスはエコソフィに関して完全な定式化はせず、各人にそれぞれのエコソフィがあると考えている。また、ディープ・エコロジー運動は、様々な哲学や宗教、思想を持つ人々により(様々なエコソフィに基づき)様々な形で行われているが、ネスは、その多様性が力になると考えている。多様な立場から物事を見ることで、多様な意見や問題への解決法が出てくるからである。

しかしさまざまなディープ・エコロジーは、生命中心主義的な思想から環境の保護を行うという点で、互いに一致している。そこでネスは、多種多様なディープ・エコロジー運動が最低限一致できるプラットフォーム原則を提示した。ネスは、この原則に同意することで、異なる思想的背景を持つ人々が行動のレベルで合意し、環境の保護という同じ目標に協力できると考えたのである。この考え方は、地球規模の環境問題のような、グローバルな視点やグローバルな取り組みが必要となる合意形成において有効な枠組みとなるだろう。桑子がローカルな個別性に着目することで合意を見出そうとしているのに対し、ネスは各人の思想背景という個別的な要素には拘らないことで、一定の合意が得られると考えている。ローカルな環境倫理から導き出される合意形成と、グローバルな環境倫理から導き出される合意形成には、それぞれの視点に対応した、相応しい対象領域があると考えられる。グローバルな環境倫理思想はグローバルな領域を対象とし、ローカルな環境倫理思想は、ローカルな領域を対象とするのである。

結論

グローバルな思想とローカルな思想に基づく環境倫理について考察した結果、二つの思想にはそれぞれ問題点や限界があり、それを互いによって補うという、相補的な関係性があることが明らかとなった。よって、これからの環境倫理思想を考える際、一方の思想を退け、他方の思想を採用するのではなく、グローバルとローカル、互いの視点を軽視せず、場に合わせて適用していくことで、思想の共存を図っていくべきだと考えられる。もちろん、環境問題の解決のための合意形成には、まだまだ課題が多い。しかし、ここで示された枠組みを踏まえながら議論することを通じて、よりよい問題の解決方法が築けるのではないだろうか。

主要参考文献

- 鬼頭秀一 (1996) 『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』 筑摩書房
- 桑子敏雄 (1999) 『環境の哲学』 講談社
- 『季刊「公共研究」第3巻第2号』 (2006) 千葉大学公共研究センター